

図書館だより

'87. 10

『そして誰もいなくなった』

アガサ・クリスティー作

10人しかいない島で
マザー・グースの童謡をバックに
連続殺人事件が起きる
一人減り 二人減り・・・
そして 最後の一人も殺された
犯人は誰か



小説 933.9/C58



ドラマ 932.9/C58

目次

女には向かない職業	2	自己紹介による図書館職員ラインアップ	7
<I>推理小説と私	川勝正治	4	高橋園子・小関淳子	7
「ぶやら新書」のこと	5	藤に咲く花	7
			ハナミズキ 永田淑子	8

女には向かない職業

—— 名探偵登場 ——

シャーロック・ホームズの第1作『緋色の研究』が発表されて、今年でちょうど100年になる。今やホームズは、世にシャーロキアンと称せられる熱狂的なファンを数多く持ち、名探偵の最高峰として君臨している。日本でも10年前に、シャーロック・ホームズ・クラブが創立されたという。推理小説は謎ときの愉しみの他に、魅力的な探偵役の登場も重要なポイントである。さら星のごとき名探偵の世界を垣間見てみよう。

日本では、以前、推理小説とはいわず、専ら探偵小説といていた。しかし、そこに登場するのは、本職の探偵ばかりではない。推理小説の開祖とされるのはE. A. ポオだが、彼の創出したフランス人オーギュスト・デュバンが、そもそもアマチュアなのである。初出の『モルグ街の殺人事件』が1841年だから、ホームズよりも更に50年ほど以前、今から146年前のことになる。デュバンは精緻な推理を働かせることにより、警察も投げだした難事件を解決してしまうのである。『モルグ街の殺人事件』の冒頭近く、友人との散歩中に、沈黙の10数分間の友人の思考過程を推理してしまうくだりや、『盗まれた手紙』のトリックは、あまりにも有名である。

デュバンのように、推理力のみをもって事件の解決に当たるのを“アームチェア・ディテクティブ。(安楽椅子探偵)というが、推理小説の世界にはこの類が少なくない。中でも印象的な一人が、ヴァン・ドーゼン博士である。ほっそりとして子どものような体つき、黄色っぽい蓬髪をいただいた異常に大きなドーム状の頭、強度の近眼、そして、哲学・法学・医学等々の博士号を持つこの人物は、僅か2・3時間手ほどきを受けただけで、あとは論理的に思考することにより、チェスの世界チャンピオンを15手で負かしてしまうという恐るべき頭脳を持っている。その故に“思考機械”とあだ名されるヴァン・ドーゼン博士の生みの親はJ. フットレルであり、脱獄ミステリ『第13号独房の問題』は傑作として評価が高い。

日本人でこのタイプの探偵をあげるとしたら、文化大学古典文学科助教授伊丹英典であろうか。作者の加田伶太郎は、かの福永武彦のこの分野でのペンネームであり、“誰だろうか。(Tare darouka)のアナグラムである。このシリーズは8篇しかないが、マニアの間にも評判がよいようである。現在刊行中の『福永武彦全集』(新潮社)にも、もちろん収録されている。

小栗虫太郎『黒死館殺人事件』に登場する法水麟太郎は、ベダンティックのかたまりともいうべき人物で、あるいは読む人によって、好き嫌いが分かれるかもしれない。

宗教家で素人探偵といえ、まずブラウン神父に指を折る、丸い頭に団子っ鼻、黒い大きな帽子にこうもり傘を持ったこのカトリック司祭は、深遠な思想家G. K. チェスタトンの創造にかかる。天真爛漫なブラウン神父が、ホームズに負けず劣らずの活躍をする全5冊のシリーズは、読者を魅了してやまない。日本でもファンが多く、先年、井上ひさしの編集で『「ブラウン神父」ブック』(春秋社)が出版されている。また、ブラウン神父もの以外の著作を集めた『G. K. チェスタトン著作集』全10巻(春秋社)も刊行された。アメリカでは去年から、本格的な著作集が刊行されている。いずれも当館にある。

もう一人、宗教家を挙げておこう。ユダヤ教のラビ(教師)、ディヴィッド・スモールである。舞台は多く現代のアメリカ。まだ若いラビが否応なしに事件に巻き込まれ、数々の軌轢や圧迫の中で推理を働かせ、ついに難事件を解決する

「曜日シリーズ」は、なかなか読みごたえがある。作者ハリイ・ケメルマンは、『9マイルは遠すぎる』という佳作も書いている。これはニッキイ・ウェルト教授なる探偵役が、通りすがりに耳にしたたった一言から殺人犯人を推理指摘する、というストーリーである。

アメリカ推理小説界を代表するエラリー・クイーンは、同名の探偵役を登場させた。作中のクイーンは小説家であるが、ニューヨーク市警の警視を父に持った縁で、犯罪捜査に乗り出すのである。『ローマ帽子の謎』に始まる10冊の「国名シリーズ」は、本格派推理小説の雄であり、また、読者への謎ときの挑戦をしたものとしても有名である。作者エラリー・クイーンは、もう一人特異な探偵を創造した。ニューヨーク郊外、ハドソン河畔のハムレット荘に住むドルリー・レーンがその人で、長身、白髪、端麗な身のこなし、もと舞台の名優である。耳が不自由になったため、引退したという、醫者の探偵役は、おそらく彼だけだろう。『Xの悲劇』『Yの悲劇』『Zの悲劇』そして『レーン最後の事件』の4作に登場する。ことに『Yの悲劇』は傑作の誉れが高い。

密室殺人の古典として知られる『黄色い部屋の謎』で活躍するのが、若干16歳のルールタビユ、新聞記者である。作者ガストン・ルルーは、この1作で推理小説史上に名前が残った。

素人探偵の中で、このおばあちゃんの名を忘れてはならないだろう。イギリスの片田舎セント・メアリ・ミードに住むミス・マーブルである。せんさく好きでおしゃべりとくれば、これぞ女性の鑑だが、うるさいばあさんと思っている内に、ちゃっかり事件を解決してしまう。読む度に、作者アガサ・クリスティのあの微笑んだ顔が、マーブルばあさんその人に見えてきて、何とも疲れる。しかし、憎めない存在ではある。

さて、本来追われるはずの泥棒が、ヒーローとなって読者を楽しませるシリーズがある。そう、お察しのとおり、アルセーヌ・ルパンである。このシリーズは『アルセーヌ・ルパンの逮捕』が第1作というのも意表をついている。ルパンとホームズは、男の子にとって”はしか

のようなもの、誰でも一度は熱中してしまう。が、女の子はどうだろう。ルパンはどちらかと言えば冒険小説に近く、格としてはホームズに数段劣る。作者はモーリス・ルブラン。

泥棒の次は、順序として警察官だろう。まず最初は、スコットランド・ヤードのフレンチ警部。推理小説のベストテンには、必ずといってよいほど顔を出す名作『梅』を書いたF.W.クロフツの作品に登場する。クロフツはフレンチ警部を、デュバンやホームズのような天才型の探偵ではなく、努力型の凡人タイプに描いた。1920年代は推理小説の黄金時代といわれるが、クロフツはその時期に、地味な作風ながら構成の見事さで推理小説に新境地を開いたとされる。

そういえば、探偵役をつとめて好評な警察官は、いずれも現実的な凡人型である。神のごとき推理力も、超人的な行動力も持ち合わせてはいない。G.シムノンのメグレ警部、エド・マクベイン「87分署シリーズ」のスティーヴ・キャレラ刑事、P.ヴァーラー、M.シュールヴァルのマルティン・ベック警視、皆、人間くさいキャラクターである。「87分署シリーズ」(30数冊)やマルティン・ベックもの(10冊)は、キャレラやベックを中心とする警察官の群像を描いた秀作シリーズで、謎ときの興味もさることながら、織りなされる人間模様にも味がある。

さて、本職の探偵が登場する場面であるが、紙数が尽きた。ホームズ、ポアロ、マーロウ、明智小五郎、金田一耕助等々、全て省略に従う。ただ、タイトルにあげた「女には向かない職業」のことだけは言っておこう。これはクリスティの後継者との声も聞こえるP.D.ジェイムズの作品のタイトルである。そこに登場する探偵は、芳紀22歳のコーデリア・グレイ。共同経営者の自殺から、経験も資格もないままに探偵事務所を継ぐ羽目になったかわいいコーデリアは、果たして依頼人の期待に応えられるか。ハヤカワ・ポケット・ミステリで、全部で4冊出ている。「女には向くか向かないか。この冬の深夜のお愉しみに、とことん推理小説とつきあってみてはいかがだろう。

推理小説と私

川勝正治（生物学）

小学校4年生のとき、はじめて推理小説を読んだ。子供むきの抄訳2冊本で、ホームズものの四つの署名とバスカヴィル家の犬、ルパンものの奇巖城、それに地下鉄サムの4篇が収められていた。当時（昭和10～15年頃）は少年倶楽部が子供達の人気雑誌で、江戸川乱歩の怪人二十面相シリーズや、森下雨村の冒険ものや、海野十三の空想科学小説が連載された時代であった。

中学生の頃（昭和16～20年）は大戦中の学徒動員などで、趣味の本など手にするひまもなかった。ただ、母方の祖父（医師で、本好きであった）の書庫にあったアルセーヌ・ルパン全集は完読したし、乱歩の幽霊塔や、犯罪ものをいくつか読んだ。

戦後になって、昭和25年頃から、いろいろな文庫版や新書版の推理小説の訳本が出版されるようになった。往復2時間の汽車通学・通勤が15年間も続いたということもあって、時間つぶしにあれこれの小説——冒険ものや、心理ものや、SFものを含めて——を読みあさった。デュ・モオリアのレベッカなどは何回も読み返した当時の本のひとつである。

ハヤカワ・ポケット・ミステリーの刊行は嬉しいことであった。欧米の作家達の作品が、古典的なものも含めて次々に出版されたのである。ヴァン・ダイン、カー、アンブラー、クイーン、クロフト、クリスティー、シムノン、ハメット、ピガース、アイリッシュ、セイヤース、グリーン、ルルウ、チャンドラー、マクドナルド、ガードナーなどの作品を読み続けた。新潮文庫、

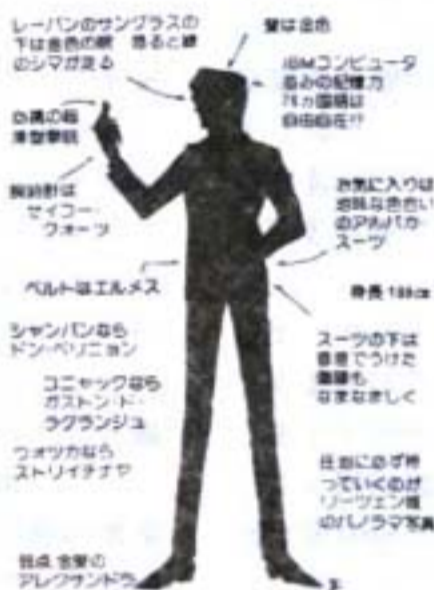
角川文庫、創元推理文庫などにもミステリーもの、スパイもの、オカルトものなどが次々に出版され、新しい作家のものも読むことができた。

私の推理小説の読みかたは、買い求めた本にはすぐ蔵書印を押し、解説の部分から読み始めるのである。また、気に入った作品があれば、その作家のもの全部を読むことにしている。たとえば、ホームズものなら全作品の他にパロディものや、シャーロキアンの作品も集めるといふ具合である。シリーズものでは、エルキュール・ポアロもの、フレンチ警部もの、クイーンの国名シリーズ、アルレーの悪女もの、それに007ものや、銭形平次もの（400篇あまり）を集めた。ガードナーのペリイ・メイスンもの、検事もの、ドナルド・ラムもの（あわせて120冊ほど）、シムノンのメグレ警視もの（50冊）、ド・ヴィリエのプリンス・マルコシリーズ（50冊）などが気に入っている。

原作者が亡くなったりで、気に入った本を探すのがだんだん難しくなってきた。最近のものでは、文春文庫、サンケイ文庫、角川文庫などに読

みごたえのある作品があった。

推理小説は、私の夜眠る前の1時間ほどの楽しみである。



イメージ・オブ・プリンス・マルコ

「ぶやら新書」のこと

—— 回想と目録 ——

「ぶやら新書」の最初の1冊が発行されたのは、奥付によれば昭和36年4月30日であった。私が高校2年の時である。もう記憶が定かではないが、その前夜、「ぶやら新書」なるものが刊行される(た)という案内を、多分新聞で読んだような気がする。それは、北海道生まれ、または、ゆかりの人々による50冊の豆本シリーズで、1冊につき150円、3冊分ずつ前納すれば、刊行の都度送付するというものだった。当時は、コーヒー60円、ラーメン50～80円、新聞購読料330円、朝日ジャーナル40円、岩波新書100円の時代である。3冊450円という金額は、私にとっては楽でないどころか、かなりきついものだった。それでも、本のことなら何とかかなるさと、とにかく申し込んでしまった。

ぼつりぼつり送られてきた「ぶやら新書」は、それはまあ、すてきな宝物だった。文庫本を一回り小さくしたような大きさで、1冊60ページほど、掌に入ってしまうような可愛らしさである。また、北海道の深い森林と、アイヌの衣裳の文様を思わせる表紙の装画(田辺三重松)が、すばらしい雰囲気を出していた。

内容はもっと魅力的だった。例えば、第1巻は知里真志保の『えぞおばけ列伝』だが、偉い学者の顔と世話にくだけた文章が結びつかず、びっくりしたものだ。これは繰り返し読み、その後、岩波文庫で『アイヌ民謡集』に収められて出てからも、飽かず読んだ。第3巻『雪虫』は、北海道の人間にとって懐かしいテーマであり、また、著者河野広道氏を存じあげており、興味深く読んだ。これで覚えた雪虫の和名トドノネオオワタムシは、未だに忘れない。第4巻八木義徳『摩周湖』は、「摩周を見て死ぬ!」という台詞だけが、いたく気に入ってしまった。

「ぶやら新書」の発行者和田義雄が、札幌にあるサボイアという喫茶店の主人であることは、たまたま同封されてきた同店の小冊子「窓」(

「ぶやら」は、アイヌ語で「窓」のことという)で知った。また、氏は、児童文学作家として著名であることも、おいおい分かった。一度訪ねてみたいと思わないではなかったが、高校生は喫茶店に行くことを禁止されていたので、当時はかなわなかった。堂々と入れるようになってからも、ついに足を向けることなく、中央警察署の向い通りにあったサボイアは、昭和40年代の後半だろうか、無くなってしまった。

私の「ぶやら新書」は、大学生になった私と共に東京に移住、数年後、無事にまた札幌に帰ってきた。しかし、20冊をちょっと切れる辺りで増加は止まっていた。版元のせいではなく、こちらの財布の事情だった。何しろ、学生寮での生活とはいえ、月2万円程度でやりくりしていた当時である。欲しい本は限りなくあるし、「ぶやら新書」の購読料は、高校時代よりも重い負担だった。全巻の完結後、別冊として『執筆者・会員住所録』が刊行されている。それには中途退会者もちゃんと載っているが、自分の項を見ると、遅くとも大学2年の秋口までにはやめたらしいのが分かる。札幌に帰った後、私の「ぶやら新書」は、いつの頃か、鍍金柄の材料として、古本屋に渡してしまった。中絶したこと、処分したこと、何れも慙愧にたえないが、それだけに、会員住所録に残っている自分の名前が恨めしい。

この度、図書館に入った「ぶやら新書」は、元版ではなく、昭和56年に沖積舎から複製されたものである。この複製版は、判型が一回り大きいこと、ジャケットがついていること、表紙装画が別物であることなど、いくつか元版と違いがある(元版は10冊ほど、既に所蔵されている。比べてご覧いただきたい)。また、別冊の『執筆者・会員住所録』は付いていない(これは私にとってはちょっとり慰めでもある)。別冊にあった各巻解説は、複製版では、各冊の巻

末に「版元ノート」として載っている。元版がいとしい人たちには、複製版はとんでもないシロモノであるが、元版の古書価値を考えると、何はともあれ、このユニークなシリーズが格安で、全巻揃って所蔵できる運びになったのはめでた

い。

なお、本学の小笠原克先生が、第46巻『北海道にて』を書いておられる。シリーズ最年少。当時「まだ少壮・気鋭」ということであった。
(〇生)

ぶやら新書

左：元版

右：複製版



「ぶやら新書」(全50巻) 目録

請求記号 081/P98/(巻数) 文庫・新書コーナーに排架

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1『えぞおばけ列伝』 知里真志保 昭和36.4.30 | 18『一日一言抄』 市川謙一郎 昭和38.10.15 |
| 2『サビタの記憶』 原田康子 昭和36.6.20 | 19『石狩』 伊藤整 昭和38.11.10 |
| 3『雪虫』 河野広道 昭和36.7.20 | 20『おとつあんの歌』 石森延男 昭和39.4.30 |
| 4『摩周湖』 八木義徳 昭和36.8.20 | 21『歳月のかけに』 畔柳二美 昭和38.12.30 |
| 5『風雪』 伊東音次郎, 並木凡平 昭和36.9.20 | 22『稚情歌』 船山馨 昭和39.11.1 |
| 6『新ユーカラ譚』 木村不二男 昭和36.10.20 | 23『物語北海道人物誌』 脇哲 昭和40.5.1 |
| 7『君恋し』 時雨音羽 昭和36.11.20 | 24『原野と森の動物たち』 永田洋平 昭和40.6.1 |
| 8『椿と狐と蟹』 高木黄史 昭和37.1.20 | 25『北海道のたべもの』 小幡弥太郎 昭和40.12.1 |
| 9『蟻の足あと』 支部沈黙 昭和37.2.20 | 26『北海道樹木誌』 今田敏一 昭和41.5.1 |
| 10『小さな熊祭』 更科源蔵 昭和37.4.10 | 27『異端の舌』 中村暹一 昭和41.10.1 |
| 11『蝦夷糞尿談』 坂本直行 昭和37.6.10 | 28『釣迷記』 猪俣庄八 昭和42.10.1 |
| 12『山樹野花』 橋内古彦 昭和37.7.30 | 29『明治の女』 森田たま 昭和42.11.15 |
| 13『粉雪の街』 竹内てるよ 昭和37.9.10 | 30『啄木と函館』 阿部たつを 昭和42.12.15 |
| 14『山の鳥森の鳥』 斎藤春雄 昭和37.12.30 | 31『北の旋律抄』 飯塚朗 昭和43.1.15 |
| 15『ふるさとの旅』 川奈美智子 昭和37.10.30 | 32『露囚物語』 寒川光太郎 昭和43.8.15 |
| 16『熊』 犬飼哲夫 昭和38.3.30 | 33『砂金掘り夜話草』 日塔聰 昭和43.9.15 |
| 17『真説江差の繁次郎』 中村純三 昭和38.5.30 | 34『北海道の山旅』 伊藤秀五郎 昭和43.11.10 |
| | 35『回想の札幌』 内田亨 昭和43.12.1 |

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 36『掌編北海道史年表』 奥山亮 昭和43. 11. 10 | 昭和46. 10. 5 |
| 37『鯉場風土記』 越崎宗一 昭和44. 8. 1 | 45『随筆松浦武四郎』 古田武三 昭和46. 11. 1 |
| 38『えぞ切支丹史』 須藤隆仙 昭和44. 10. 13 | 46『北海道にて』 小笠原克 昭和46. 12. 1 |
| 39『義経入夷伝説』 樋口忠次郎 昭和44. 12. 1 | 47『江差花柳歳時記』 篠瀬仁右衛門 昭和47. 2. 1 |
| 40『春秋』 松本達雄 昭和45. 5. 1 | 48『アイヌ語種族考』 山田秀三 昭和47. 7. 1 |
| 41『北海道の湖』 湊正雄 昭和45. 9. 1 | 49『久保栄の思い出』 沢田誠一 昭和47. 11. 1 |
| 42『蛍とふ肌』 和田芳恵 昭和45. 12. 1 | 50『北海道と円空』 高倉新一部 昭和48. 2. 1 |
| 43『オホーツク夜話』 米村喜男衛 昭和46. 1. 5 | |
| 44『ズボンについた草の種子』 友田多喜雄 | |

自己紹介による
図書館職員ラインアップ 7

高橋園子 奉仕部

調査・案内カウンターを担当しています。時代の動きに敏感な学生の皆さんの求める資料を探すお手伝いをしながら、また刺激を受けることも多く、図書館で働いていることを幸せに思っています。都合で退職し、再び縁会って復職して半年が過ぎました。3年間のブランクがあります。当時の一年生が四年生になっていました。この3年間で閲覧室や書庫にさらに書架が増え、館外資料室も2カ所から5カ所に増えて資料の増加ぶりを示していますが、図書館の雰囲気は余り変わっていません。大きな変化は施行段階だったパーソナル・コンピューターが図書館の業務に定着していたことです。この「図書館だより」も今では編集委員がワープロで打っていますし、洋書の新着図書目録も毎週発行されています。雑誌目録も現在入力中で、手書きの目録稿に代わって来年度中には発行の予定です。私も機械は苦手とは言っておられず、練習の結果少しワープロが使えるようになりました。

小関淳子 奉仕部

4月から、貸出カウンターを担当しています。動めてから半年が経ちましたが、まだまだ悪戦苦闘の毎日です。

学生時代の私と図書館といえば、レポートに必要な本を必死に探したこと、キャレルや閲覧室の北側で、もう少し

早くからしていればよかったと、いつも後悔しながら試験勉強をしたこと、そして静まり返った時間に、何も考えずに外を眺めていたことなどが思い出されます。お気に入りの場所は閲覧室南側奥の窓側の席。いつもかわいらしい花を咲かせている花壇、数は少ないけれど季節の移り変わりを教えてくれる木々、屋根と屋根の間から頭が見える、どこまでも伸びていきそうな背の高い木、そして、見るといつもほっとさせてくれるマリア像など、狭いキャンパスながらも安らぎを与えてくれる窓からの風景に、いつのまにか時の経つのを忘れていたものでした。が、その図書館は今は忙しい仕事の場、体力が勝負！を痛感しながら、一人前の図書館員を目指し、奮闘しています。

~~~~~ 藤に咲く花 7 ~~~~~

ハナミズキ

学長 永田淑子

ハナミズキと私の最初の出会いは、今から17年前のことである。当時私は東京で勉強中で、元麻布の修道院に住んでいた。そして、日曜日の午後にはよく近くの有栖川公園に出かけた。公園はかなり広く、小高い広場には桜と梅が見事であった。坂を下ると日本風の庭園になっており、いけにはアヒルが泳いでいた。



初夏のある日曜日、4弁の白い花が一角を彩っているのに出会った。派手やかなどころのない、その清楚なたたずまいに心魅かれるものがあった。それは日本からアメリカに贈られた桜に対する返礼として、アメリカ側から送られたハナミズキであると書いてあった。

それから10年後、アメリカの修道院や街路で同じく白と、そして薄紅色に咲く花を見て、ハナミズキとの再会を何故か嬉しく感じた。懐かしい人に出会ったような気持ちがあったのである。

昨年思いがけなく、校庭に1本のハナミズキが寄贈された。今年は樹の上の方にたくさん小さな花をつけてくれたので、成長が楽しみだ。

写真撮影 浦田涯(公仕室)

昭和62年度上半期 購入希望により入った本 (一例)

- 『ファニーフェイスの死』 林真理子 集英社 1987
 『暗い血の旋舞』 松本清張 日本放送出版協会 1987
 『堀の中のプレイ・ボール』 安部龍二 講談社 1987
 『How '87 積極派地球人のための情報源』 アルク 1987
 『画集グランドマア・モーゼス』 オットー・カリア編著 加藤恭子訳 サンリオ 1986
 『サラダ記念日』 俵万智 河出書房新社 1987
 『日出る国の工場』 村上春樹 平凡社 1987
 『ベッドタイムアイズ』 山田詠美 河出書房新社 1987
 『風が吹くとき』 レイモンド・ブリッグズ作 小林忠夫訳 篠崎書林 1987
 『1987-88 TOEFLの留学』 小川富二他 荒竹出版 1987
 『写楽 仮名の悲劇』 梅原猛 新潮社 1987
 『ベジタブルケーキ』 鎌田明彦他 柴田書店 1985
 『エジプトの死者の書』 石上玄一郎 人文書院 1986

藤女子大学 図書館 だより 第29号 1987.10.20
 藤女子短期大学

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館